

無藤隆

10 の姿の育ちを事例からとらえる

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、5 領域の内容の経験を通して資質・能力の3つの柱がいかに育っていったかを具体的な姿として示すものです。それは保育内容の5領域の主要な点を整理していますが、同時に資質・能力が幼児期にどのような活動の姿の中で育成されているかを分かりやすくしたものなのです。ですから、10の姿から個々の子どもの活動を見るにしても、資質・能力の視点をいつももう一方に念頭に置いておくのです。

10の姿の整理は年長後半での様子から作られました。4歳、3歳、さらに2・1・0歳で同じ10の姿となるということではありません。それぞれの時期に子どもが経験してほしい内容を整理して、資質・能力の育成と関連づけていくことで、5個の姿なり、12個の姿なりをそれぞれの園で考える必要があります。そして、そうやって整理して、そこには入らないが、育ちとして大事なことも見付かるかもしれません。

この姿は1つの事例に一対一で対応するものではありません。鬼ごっこなら健康、植物遊びなら自然、音を叩くなら表現、という具合に主なところが定まることもあります。自立心や思考力や道徳性などはいろいろな場面で現れてくるでしょう。色水の取り合いでルール作り・守り方で出てきました。恐竜の博物館を作る活動では思考力や協同性が発揮されています。むしろ、10の姿などを視点として使って、活動の様子を読み取り、そこでの多様な学びの可能性を取り出すことが大事です。そのことにより、その活動をどのように発展していけば良いかが見えてきて、指導計画の見直しにつながります。

この姿は乳児から年長(そしてその先へと)伸びていくものです。健康な心と体のように比較的まっすぐに乳児から年長につながるものもありますが、人間関係などは身近な大人との関係から他の大人、クラスの子どもなどへと広がっていき、次第に仲良しであることから協力する関係へと発展していきます。そういった年齢を超えた育ちの筋道をいくつも描いてみましょう。

10の姿①

健康な心と体

図鑑を見て動物になりきり、その動物の食べる様子や吠えるところなど、一つ一つの動きにこだわって表現をする。それは生きたものである動物になりきることによる身

体的な理解です。普段行わない動きまで含めて、声を出し、体を動かし、体の柔軟性を増していくでしょう。太い声、細い声、高い声と出します。動き回り跳ね回り、と様々な運動の中でしなやかさを作り出します。先の見通しを得ながら、こうしていけば良いものを作ることや体を動かすことを考えます。ごっこの世界のことで、しかも動物のことですが、健康で安全な生活を作ることにつながるものでもあります。普段から体を動かし、健康な習慣や安全なやり方を知って、自ら実行していくのです。

10の姿②

自立心

子どもは身近な環境に主体的に関わり、活動を楽しみます。主体的とは自らやってみたくなり、それをやっていこうとすることです。そこが主体性の始まりです。その主体性を引き出すには、子どもがやってみたいそうなが見付かったら、その機会を提示して、子どものやる気を引き出し、積極的で工夫に富んだやり方で取り組むことを誘っていくのです。常にうまくいくとは限りません。ヨーグルトを触り指に塗りたくることに興味を持っていたので、それと似た感触の絵の具を使い機会を用意します。ところがなぜか興味を示さないのです。おそらくまた別なものに別な機会には自ら進んで試し工夫し、自分の力でやり遂げ、自信を得ていく子どもなのでしょう。

10の姿③

協同性

他の子どもと一緒に動物になってみる遊びをするようになりました。自分の好きな動物の演技をして、友達に好評で、受け入れられるようになります。友達と絵本を広げて会話をしたり、一緒になって、「恐竜博物館」をつくることになったのです。いろいろなアイデアを互いに出し合いながら、共通の目的を実現していこうとします。このようにして、それぞれの思いや考えを出し合い、一緒のものを作る過程で、工夫したり、協力したりして、充実感を感じ、皆で考えたアイデアを共同のものとして実現していきます。それぞれの子どもがその流れの中で認められ、各々の得意なところに自信を感じ、一緒にやる楽しさを味わい、協同性へと発展していく姿なのです。

10の姿④

道徳性・規範意識の芽生え

皆で作った一本の色水を誰が持って、ジュース屋さんなどに使って良いか。それぞれが作った同じ黄色の水は 1 つのボトルに集めていたのです。でも、3 人で作ったものを一人で持って使いたいのです。くじ引きをすることになりました。その引く順番が問題なので、それをじゃんけんで決めます。結果はじゃんけんに勝った子が最初に引いて、当たりとなりました。このように、自分たちでルールを作り、それに納得がいった以上はそれをきちんと守る。これが規範意識です。それぞれ自分も作ることに加わったのだから自分のものにしたい。その気持ちも分かります。相手の心に思いやる気持ちが育っているのです。思いやりとルールの意識が統合されていきます。

10 の姿⑤

社会生活との関わり

子どもが発見し楽しんでいる様子を保護者に伝えます。そうしたら、家庭でも、その遊びを始められるよう、音の出るおもちゃや素材を準備してくれるようになりました。園で見つけた大好きなことを家庭でも共有し、家庭でも行い、また園での活動を広げるために協力してくれています。「社会生活」とは園の外の人間関係や施設などを指します。家庭であり、家族です。近隣には様々な年代や時に外国人や障害のある人も暮らしています。実際に接してみて、一緒に活動をするを通して、どのように関われば良いのか、どうすれば役立てるかなどを分かっています。その始まりは園での楽しい活動を家庭と共有し、また地域の方々にも見せていくことなのです。

10 の姿⑥

思考力の芽生え

恐竜博物館を部屋に作り、お客さんを呼ぶ。恐竜はほんとうみたいに見えるだけでなく、怖いものは怖がらせ、草食の恐竜は親しんでもらうようにします。恐竜の時代はどのような自然環境だったかを図鑑で見て少しでも再現します。このように身近な環境に友達と一緒に関わり、ものの性質や働きや仕組みを調べたり、気付いたりします。ごっこにしても、元の様子をリアルに模倣するには、その姿や生態を知って、でも、それを保育室の限られたスペースと素材と技術の中で現さねばなりません。友達同士でいろいろなアイデアを出して、それが良い、使える、こう直そうという具合に協同制作に生かします。新しい考えを生み出しながら、考える楽しさを味わいます。

10 の姿⑦

自然との関わり・生命尊重

ヨウシュヤマゴボウの実は潰すと赤黒い汁が出て、それに石けんの粉を入れて泡立てると、ムースみたいになります。秋になり、実がなることに気付き、自然の変化を感じ取りながら、実や汁や石けんによる変化への好奇心・探究心を持って、身近な事象への関わりを進めます。ただの実が潰し、石けんを入れることで、泡立ちムースみたいになる。ほんとうに魔法のようです。でも、それは同時に科学への芽生えです。いつも一定のやり方を踏めば得られる結果であり、その元がヨウシュヤマゴボウの実の中にあるものなのです。自然とはそれぞれ複雑なものですが、手順を踏めば、一定の結果として返るという意味で予測できることとなるのです。

10の姿⑧

数量や図形などへの関心・感覚

くじ引きを引くのに何番目が良いか、どちらが当たりやすいのか。1番目と2番目と3番目では何か当たりやすさに違いがある気がする。3番目は最後で不利なのではないか。こういった考え方は数理的な思考の始まりです。まだ実際に計算するわけではなく、直感的な判断です。きっとこうなりそうだという感覚が働きます。幼児は正確な数処理は小さな数で、しかも指やおはじきなどを使って出来る程度ですが、数量の感覚はいろいろな場面で発達してきています。身長や体重などの大きな数、くじを引くなどの未確定な数、カルタなどでの数えることと厚みという量の対応等々いろいろなところで、数量感覚が伸びてきていて、それが小学校算数の土台となります。

10の姿⑨

言葉による伝え合い

絵本が大好きで、恐竜の絵本を一人でも何度も見えています。担任が声を掛けると、嬉しそうに担任にその内容を話します。誕生日会では、その恐竜になりきって、表現活動をしています。そこから恐竜になりきって友達の中に入るようにもなりました。生活発表会でもなりきって、友達にも好評だったのです。このように、言葉の発達には絵本が大事な役割を果たしますが、同時にいろいろな内容を大人と話したり、友達同士で遊ぶ中で言葉が変わることが増えていきます。最初は身ぶりが中心でも、複雑で微妙なことを伝えたい気持ちがはっきりしてくると、それを言葉でも言い表すようになり、また大人や回りの子どもたちの発言に耳を傾けるようになるのです。

10 の姿⑩

豊かな感性と表現

音に気付きます。自分が床を叩くと音が出る。バチで太鼓を叩くと、それと違うもっときれいな音が出る。子どもは年齢を問わず、このように、身近な環境に関わって、その出会いから様々な発見をします。まず、心動かす出来事に出会います。「あれ」「ふしぎ」「おもしろい」と心情と動き、感性が働き出します。床と太鼓と音の響きが違うといった素材の特徴による違いにも気付くし、叩き方により音が変わるという表現の仕方による違いも見いだすでしょう。その叩く面白さを担任と共有します。叩いて音が出たときに担任の顔を見るのは、こんな面白いことを見つけたよという呼び掛けです。そこで心が通い合い、面白いね、という共感が交わされるのです。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは

今回の改訂では、子どもの育成の根幹として、資質・能力の育ちを置きました。「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」と名付けられています。これだけ見ると、小学校みたいに思えますが、もっと具体的な記述を見ると、乳幼児期からの育ちの中核に迫っていることが分かります。まず、知識は気付くことが始まりです。物事の個々の特徴を発見することです。技能はできることであり、日々、幼児は出来ることが増えていきます。思考力などは考えることであり、試行錯誤しながら工夫することがまさに頭を使って考えることです。学びに向かう力は、心動かす体験をして、やりたいことが生まれて、それを最後までやり遂げようとすることです。

その資質・能力を年長後半での5つの領域の内容に当てはめて整理したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。子どもがいろいろな活動の中で実現しつつある資質・能力の現れです。それは具体的な姿として保育者が捉えるものであり、一つ一つの活動というより、多くの活動の中で様々な子どもが示す様子です。それが保育者側のこう育ってほしいという願いと対応させていくことで、その願いの方向へと子どもが育っていつているかが見えてきます。

この10の姿は完成品ではありません。1つの活動で見えるものでもないのです。さらに伸びて行っている様子であり、いくつもの活動を通して浮かび上がってくるものです。だからこそ、保育を進める際のメドとして役立つのです。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは

今回の改訂では、子どもの育成の根幹として、資質・能力の育ちを置きました。「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」と名付けられています。これだけ見ると、小学校みたいに思えますが、もっと具体的な記述を見ると、乳幼児期からの育ちの中核に迫っていることが分かります。まず、知識は気付くことが始まりです。物事の個々の特徴を発見することです。技能はできることであり、日々、幼児は出来ることが増えていきます。思考力などは考えることであり、試行錯誤しながら工夫することがまさに頭を使って考えることです。学びに向かう力は、心動かす体験をして、やりたいことが生まれて、それを最後までやり遂げようとすることです。

その資質・能力を年長後半での5つの領域の内容に当てはめて整理したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。子どもがいろいろな活動の中で実現しつつある資質・能力の現れです。それは具体的な姿として保育者が捉えるものであり、一つ一つの活動というより、多くの活動の中で様々な子どもが示す様子です。それが保育者側のこう育ってほしいという願いと対応させていくことで、その願いの方向へと子どもが育っていつているかが見えてきます。

この10の姿は完成品ではありません。1つの活動で見えるものでもないのです。さらに伸びて行っている様子であり、いくつもの活動を通して浮かび上がってくるものです。だからこそ、保育を進める際のメドとして役立つのです。